

第1章 たびら昆虫自然園調査報告

1. たびら昆虫自然園の施設

たびら昆虫自然園は、日本に昔からある里山を再現し、自然に実際に接しながら、昆虫などの生き物を観察することを通じて、自然に対する探究心やモラルを高めてもらう目的でつくられた。

この施設は、長崎県田平町柑橘指導園として利用されていた跡地を、「たびら昆虫自然園」として整備・建設されたもので、H4年7月の開園以来、田平町が管理・運営している。

施設は4.1haあり、昆虫館と観察ゾーンに分かれている。昆虫館は、観察ゾーンで昆虫を観察するための事前事後学習の場である。標本や虫の写真、分類、また田平町にいる水生昆虫が水槽の中で生きたまま展示してある。観察ゾーンでは、昆虫の生息に適した畑・花壇、林地、草地・裸地、池・水際の4つのゾーンに分けて環境を整備・管理して、周りから集まってきた昆虫を観察できるようになっている。昆虫の飼育は一切行っておらず、持ち込みもしていない。

このように、この施設では他の施設と異なり、昆虫を飼育・展示しているわけではない。環境を作り、そこに集まる昆虫を観察してもらうという形式をとっている。そのために、毎年見ることのできる昆虫の数が増えており、現在では3,000種類以上の昆虫が確認されている。入り口の看板には、「この園には、珍しい昆虫はいません。」と書いてあるくらいである。しかし、近年ではレッドデータブックに記載されているような昆虫が園内で見つかっている。

また、季節によっても、時間帯によっても見ることのできる昆虫は異なる。季節ごとの虫のそれぞれの姿がそのまま観察できるのである。そのために、2で説明するような解説員制度を取り入れている。

2. 来園者に対する解説

この施設では、来園者に対して解説員(注1)がついて園内を周るという形式をとっている。約10人(2家族ぐらい)の来園者に対し一人の解説員が付き、この園をおよそ1時間かけてみてもらう。解説員という言葉自体聞きなれないものであるが、解説員という制度を用いるのには大きな理由がある。それは、1で説明したようにこの園では昆虫を展示しているわけではなく、園内にいる昆虫を探し、観察してもらうのが目的だからである。

ただ歩いただけでは昆虫は見つからない。開園当初、希望者だけ解説員がつくという形式をとっていたが、解説員がどういうものか知らない人が多いため、ほとんどの来園者は自分たちだけで園内を周っていた。昆虫がどういう場所にいるのか知らない人が、園内を周り終えたときに「何もいないじゃないか。」と怒って帰る、ということがたびたびあったようだ。そのために、現在のようにすべての来園者(と言っても90%

ぐらい)に解説員がついて園内を周るようになっている。このように、解説員と一緒に園内を周ることにより、昆虫のいる場所・触り方・生態、植物について、また園外で昆虫を探するときの注意点などを知ることができる。このことにより、虫の知らない部分に出会い、新しい発見をする事ができるのである。そして、来園者は身近な場所で自分で昆虫を見つけることができるようになるのである。また、身近にいる生き物に対して関心を持つきっかけとなったり、親子のコミュニケーションをとるいい機会になったりする。

解説例 1

これは、2月11日にたびら昆虫自然園に行ったときの事です。このとき訪れていた家族は佐世保から来ていて、ここに来るのは5回目です、とおっしゃっていました。12月~2月というのは来園者自体が少ない時期なのですが、実はこの時期は虫が越冬して一カ所に集まっていることが多く、逆にじっくりと昆虫を観察しやすい時期



です。2月になると晴れていれば日中は暖かく、早い昆虫では少しずつ活動し始めています。そのため、一般の人が思っているよりもさまざまな昆虫を観察することができ、ちょっと得した気分になれます。

よく来られている来園者なので、話の聞き方や昆虫の触り方など注意を守り、楽しく園内を回っていました。写真にはありませんが、畑の端のほうに石

がゴロゴロと転がっていて、その石をめくってみると多くの虫がかおを出してくれます。このことを解説員が説明し、「皆さんもやってみてください。」というので、来園者たちは自分で石をめくり始めます。大人も子供もいつのまにか夢中です。これは、家の庭先や近所の公園などでもできる虫のを見つけ方です。見つけた虫がわからないときには解説員に積極的に聞いていました。このとき解説員は、石を戻すときには下にいた虫がつぶれないようにそっと石を置くことを注意せれて、そのこともきちんと守っていました。このように、見た虫はまたもとの場所に返してやる、と言う事を教えてくれます。あたりまえの事ですが、なかなかできていない事ですし、大人の方は子供にこんな事教えたかな、と考えてほしいです。また、畑ではほぼ一年中虫のために野菜が作られているんです。ちょっと変な気がするかもしれませんが、虫たちの中には人間の作った環境で生活しているものが結構います。このときは、キャベツの裏に何かいないかな、と言う事で探してみました。葉の裏をそっとめくってみると、小さなハムシや蛾の卵、アリなどたくさん見ることができました。この頃になると、モンシロチョウがキャベツに産卵しに来ていて、運がよければ目の前で卵を産んでくれます。これは、教科書では教えられないし、映像だけでは伝わらない部分です。実際に目の前で見ることによって、感動し生命を感じる事ができ、その人の心の中に残っていくのです。これは、文字で書いて伝わるものではないですけど。





この園は、もともと柑橘園であったことから、園内には柚子の木などが多く残っています。そのために、この時期になるとアゲハチョウの蛹を見ることができます。しかし、自分で見つけるのはかなり難しいです。

このとき、水辺の観察もいきました。水は冷たいですが、それでも昆虫や水辺の生き物たちがいるということで、小川を覗いて見るとそこにはカワニナやヨコエビなどがたくさんいました。ぱっと見ただけでは、このような生き物は見えないのですが、じっと見つめ目が慣れるといろいろな生き物がいることに気が付きます。ゴソゴソと動いているものや、すばやく動くものなど、名前がわからなくても見ているだけでおもしろいです。水のそこには、落ち葉や砂で作られた薄い葉っぱのようなものがあります。それをひっくり返してしばらくすると、小さな穴から虫が出てきてヒョイともとにひっくり返します。ちょっと目を離しているといつのまにかひっくり返っていて、その瞬間が見れずに悔しい思いをしたりします。水の中にある葉っぱや石をひっくり返してみると、小さな何かがムニムニと動いています。よく見ると頭らしきところが三角になっています。解説員の人に聞いてみると、プラナリアでした。高校の理科の教科書に載っているプラナリアです。実際に見たことがある人は少ないと思います。思っていたよりすごく小さかったです。教科書のような再生の実験を成功させるのは、かなり難しいだということでした。

また、水の中にあった石をめくってみると何かの卵を発見した。カエルの卵のようでカエルの卵じゃない。カスミサンショウウオという体長 10~15 センチぐらいのサンショウウオの卵でした。この時期になると、メスが水辺にくるのを待ち伏せているオスのカスミサンショウウオも見ることができます。メスは、産卵以外は水辺の近くの岩の間などに隠れているためにほとんど見ることはできません。オスは、メスを待ち伏せするために水の中の石の下に隠れています。この卵は、3月になれば孵化し、サンショウウオのオタマジャクシを見ることができます。

次にやってきたのは、雨水でできた小さな池です。いつのまにかいろいろな昆虫がやってきたそうです。このような小さな池は探してみると身近にあるかもしれませんね。よく見てみると、ヤゴやマツモムシ(背泳ぎをする昆虫で、お知りの部分に毒をもっていて、刺されるとかなり痛い。)などいろいろな生き物たちを見つけたことができました。

右の写真は、いったいなんなのでしょう。アカガエルの卵です。このカエルは、他のカエルに比べると寒い時期に卵を産みます。この写真の卵は産卵して日にちがたっており、表面に泥がついていますが、よく見ると卵の中でオタマジャクシが泳いでいるのを見ることができます。カエルの卵が



ゼラチン質でできているということを知っている人はいると思いますが、実際に触ったことのある人はどれぐらいいるのでしょうか。ここでは実際に触らせてもらうことができます。卵の持ち方は、両手でしたからすくい上げるような形で持ちます。持ち方

を教えられると、来園者たちは積極的に卵に触っていました。「やわらかくて気持ちがいい」と来園者たちは喜んでいました。

解説例 2

これは、7月8日の解説の様子である。写真でわかりずらいかもしれませんが、この男の子の手の上にはカマキリがいます。多くの方はカマキリを背中からつかんで捕まえる人が多いと思いますが、それではカマキリが怖がったり、傷ついたりしてしまいます。この昆虫園では昆虫の触り方、捕まえ方も教えています。カマキリは前に手などおき、前に進めないようにします。するとカマキリは仕方なく手の上に乗ってくれます。こうすると、カマキリは噛みついたりせず、すぐに逃げたりしません。子供も怖がらずにカマキリを手の上に乗せることができます。



この写真は、クヌギの木を見ているところです。何を見ているのかというと、オトシブミという昆虫がクヌギの葉で作った卵を見ているところです。オトシブミは、クヌギの葉を丸めやすいように葉の根元の茎を渴いちまい残して切っておれさます。人間ではこんな事できません。そのあとに卵を産み付け葉を上手に丸めます。そのできた卵が葉についたままになっていたり、下に落ちたりしているんです。本当に器用に丸めてあります。運のいい来園者はオトシブミが葉を丸めているところを見ることができます。

少し見にくいですが、右の写真の木がなんと言う名前か知っていますか。これは、オジギソウではありません。オジギソウは草ですから、こんなに大きくはなりません。この木はネムという木です。どうしてネムの木かというと、夜になると葉をたたんでしまうからです。この木はきれいなピンク色の花を咲かせます。その花にはミツバチやコガネムシ、チョウ、ゾウムシなどが飛んできて蜜をすっています。

左の写真は、アリの巣を見ている様子です。アリの巣の周りにはたくさん砂が積み上げられていて、触るととてもさらさらしています。あんなに小さなアリがたくさんの砂を外に積み上げているのを見ると、アリのすごさを肌で感じることができます。



これは、池にいる生物を観察しているところです。池がかなり大きいために、網で水草や泥をすくって生き物を探し、バケツに移して来園者が見やすいようにしています。このバケツの中には、イトトンボのヤゴやエビなどを間じかに見ることができます。時期によっては、自分で網を使って池の水や泥を

すくい、どんな生き物が取れたか体験しながら観察することができます。

右の写真は、草原にどんな昆虫がいるのか観察しているところです。人が円になって座りゆっくりと真中に集まっていったり、一列に並んで座り壁のほうにゆっくりとすすんでいくと、バッタやコオロギ、キリギリスなどが跳ね回っているのを観察することができます。普段は何気なく歩いているようなところに、こんなに昆虫がいたのか、と改めてびっくりさせられます。



解説例 3



今日は、まず「秋の草はらの昆虫の観察会」に参加しました。時間は10時から11時30分の1時間半の間。この観察会には、小学生の女の子が2人参加していました。この2人は、姉妹でよく昆虫園に来ているそうです。

最初に昆虫館の前の芝生のところで、どんな生き物がいるのか探してみました。一列に並び壁に向かってそーっと這って行くのです。そうすると、壁のほうに虫が集まってきます。壁にのぼっているものや草に隠れているものがあります。ここでは、ツチイナゴやショウリョウバッタ、コオロギなどのバッタ類を観察する事ができました。下草がまだ濡れていたもので、思ったほど虫がいなかったようです。

そこで、場所を変える事にしました。林の中を抜けて、草はらの方へ行きました。その途中、木と木の間にはジョロウグモがたくさん巣を作っていました。それもかなり大きなクモでした。クモが大きいという事は、それだけ食べ物となる昆虫が多く、自然が豊かだという事を示しています。この大きなジョロウグモはメスで、オスはメスの比べたらとても小さいです。オスも同じ巣にいるのですが、餌が足りなくなるとオスはメスに食べられてしまうそうです。しかし、メスの巣の周りには他のオスが何匹かいるらしく、巣にいたオスが食べられてしまうと新しいオスが巣に入ってくるようです。オスは大変ですね。

さて、草むらにつくと多くの虫を観察する事ができました。歩いているだけでも、ツチイナゴやその幼生、トノサマバッタ、ショウリョウバッタ、オンブバッタなどを観察する事ができます。草むらの中には枯草を積んであるところがあり（一種のトラップのようなもの）、そこをゆすってみると何種類かのコオロギを観察する事ができました。体長1cmほどの足にまだら模様のあるコオロギもありました。草むらには大きなショウリョウバッタがいました。後ろ足を2本一緒に持ってみると、体がゆらゆらと上下にゆれます。その様子が米をついているように見えるので、コメツキバッタとも言われるそうです。私もやってみたのですが結構面白かったです。でも、やるのとやらないのがあるようですけどね。そのあと、網で草はらをすくってみ



ました。そうすると、小さな虫も観察する事ができます。すくった網の中を観察してみ



ると、オニグモやコフキゾウムシ、トビハムシ、ダニ(人にはつきません)、コオロギ、カンタン(確かコオロギの仲間、体の色は白色、きれいな声で鳴くそうです)などをみる事ができました。オニグモは、糸をたらし、その糸をたどって上に登るときどのように登るかという、前足で糸をたぐり丸めながら登ってきます。その様子は、

毛糸を巻きなおしている様子に似ていました。

今回のメインは、「バッタを釣る」ことです。そんなことできるのかと思いますよね。これが面白いように釣れるんです。約 10 cmの長さに切った細い角材に 2m ぐらいの紐を結び付けます。それをオスのトノサマバッタの近くに投げゆっくりと紐を引いていきます。そうすると、角材の上へバッタが乗ってきます。バッタが一度後ろを向き、もう一度前を向くと絶対に釣れるようです。これは、トノサマバッタのオスでしかできません。トノサマバッタのオスが交尾のためにメスの後ろに乗るという事を利用したようです。しかし、もともとはプロのカメラマンがいたずらにバッタに近くに石を投げたところ、それにバッタが乗ってきた、という偶然から発見されたそうです。このことがわかってから、トノサマバッタを写真で撮るときに良くこの方法が使われるようです。やってみると、ほんとに釣れるんです。私も夢中になってしまいました。糸を引くときに、バッタのような動きをされるといいようです。また、なるべく平らなところにいるバッタがいいようです。今回は、最初草むらでやってみたのですがどうしても草が邪魔になってしまうので畑に移動してもう一度やってみました。草むらが開けたところや畑をお勧めします。今日の観察会はこのような感じでした。

午後からは、普通の来園者の人と一緒に周りました。観察会と同じように、メインはバッタの仲間の観察と「バッタ釣り」でした。「バッタ釣り」は、親子で楽しんでいました。小さな子でも楽しんでいました。しかし、午後になるとトノサマバッタが少なくなるので、見つけるのが大変でした。やはり、時間帯によってみる事ができる昆虫が違うのはこの園の特徴だな、と改めて実感しました。



畑には、アゲハチョウの幼虫がいました。蛹で越冬するようですが、生き残るのはなかなか難しいようです。

そのあと、園を歩くと解説員の方がムカゴを見つけくれました。食べてみると、山芋の凝縮されたような味でおいしかったです。小さな子もおいしそうに食べていました。ご飯に入れて一緒に炊くとおいしいらしいです。昔の人の知恵ですね。今でも、売っているようですが結構な値段のようです。

林の中を歩いているとアカタテハやルリタテハ、クロアゲハなどをみる事ができました。この時期のチョウの色が一番きれいだそうです。ルリタテハは、羽を広げると瑠璃色でとてもきれいでした。



下を見ると、椎のみやくヌギの実、などが落ちていました。小さな子は、拾うのが好きですね。もう時期は終わってしまったのですが、栗がたくさんなっていたそうです。

タブの木の林に行ってみると、クワガタがいました。カブトムシは夏が終わると死んでしまうそうですが、クワガタは成虫でも腐った木の中で越冬するそうです。なのでこの時期にもみる事ができるようです。

雨水でできた池に行き網で泥をすくってみると、タイコウチやミズカマキリ、ハイイロゲンゴロウ、マツモムシ、ヤゴ(ギンヤンマ、ショウジョウトンボ、シオカラトンボ、ウスバキトンボ)をみる事ができました。バケットに入れてみると、観察しやすく小さな子でも見る事ができます。タイコウチが2匹、ミズカマキリが3匹も見つかった事には驚きました。

今日、ひとつ気になった事がありました。それは、来園者の中に女の子が2人、一歳の子を2人連れて来ていました。しかし、1歳の子には説明するというのが無理だし、長い距離歩くのは難しく、どちらかというとピクニックという感じで来ていたので、解説員の方がとても困っていました。このような施設では、何歳以上というののできにくいし、解説という事事態があまり知られていないので、全ての来園者に対して、こちらが伝えたい事を解説するのは難しいことだと実感しました。

解説例 4

今日は、「草はらの昆虫の観察会」が行われました。ほとんどが常連の来園者で小学生の男の子とその親がほとんどで、約十人ぐらい集まりました。よく知っている人たちなので虫の事、虫との接し方、解説員の話の聞き方など、よく知っていました。今日のメインは、バッタやキリギリスだったのですが、暖冬や雨の量の影響で、今年はまだ出てきていないようでした。

まず、昆虫館を出てすぐのところにアシナガバチの巣を見つけました。ハチと聞いたら、すぐに怖いとかさされるというイメージを持つ人が多いと思いますけど、ハチだって理由もなく刺すわけではありません。ハチを脅かしたり、攻撃したり、殺そうとするとハチはびっくりして刺そうとするわけです。そこで、ここではそーっと近づき静かに観察する事を教えています。そうすると、ハチは自分お仕事に夢中でせっせと巣をつくり、人間には気付きません。このような観察の仕方であれば、本来の昆虫の姿をその場で観ることができます。小さな子供の場合は、必ず大人がついて一緒に観察したほうがいいです。写真のように幼稚園ぐらいの子供でもハチを観察する事ができました。





次に、木の花のところを網でゆすって見ると変わった昆虫が入っていた。その昆虫は体長が1 cmぐらいしかなく、鼻が長くて背中に白い模様が入っている。ゾウムシの一種でした。正面から見ると長い鼻の横に小さな目がちょこんとついていて、とてもかわいい顔をしています。小さな昆虫を見るときもそうなのですが、観察するときには必ず手の上を虫に這わせるようにします。そうすると、虫は逃げずに長い時間観察する事ができます。絶対につかんだりしてはいけません。

つかんでしまうと、逃げたり怒ってかまれたりしてしまいます。

そのあとに、草はらで網を使ってどんな虫がいるのか調べてみる事にしました。ひとり一人交代で網を使って草のところをすくってみました。まずは解説員がお手本を見せ、その後みんなでまねをしてみます。すくったあと、網の中を見てみるとキリギリスの幼生やクモ、ダニ、ハムシなどいろいろな虫が入っていてみんな驚いていました。普段、じっと見ているだけでは見つけれられないような虫が、網を使う事によって観察できました。

最後に、畑での観察です。今回は大きなルーペを使って観察しました。ルーペを使うと、肉眼では見えない顔や足の様子など詳しく見る事ができます。いつもと見え方が違うので、みんな興味心身でした。簡単に持ち歩ける道具なので、一つ持っておくと家の近くなどでもっと詳しく観察できるでしょう。

解説例 5 - 夜の観察会 -

8月11日、夜の観察会が開かれました。参加は予約制で、参加者は約30人とちょっと多目。子供連れが多かったです。解説員は園長で、その他にも補助員として3・4人の人が一緒に園内を回りました。まず、園内を回る前に注意事項が言われました。夜、外を出歩く事は危険であり、なれている場所でも解説をするのが大変だからです。注意事項は、園長より前に行かない、勝手な行動をしない、人の話を聞く、勝手に明かりをつけない、と言う事でした。午前中に雨が降っていて足場が少し悪かったのですが、夜には晴れて十分に園内を回ることができました。



今回は、ゾウムシ、ナナフシ(体長が約10センチ程度、まだ大きくなるようだ)、ヤブキリ、ウマオイ、ショウリョウバッタ、コオロギ、ミヤマカミキリ、コクワガタ、ノコギリクワガタ、ムカデ、ホタル(6月に出るものとは違う種類)、メダカ、ハイイロゲンゴロウ、ミズカマキリ、タイコウチ、ヌマエビ、ヨコエビ、カワニナ、トビケラの幼虫、ガ、コガネムシ、ブイブイ、カブトムシ(60匹ぐらいいた、今年の夜の観察会では最高の数)などたくさんの虫を見ることができました。大人も子供もはじめてみるものがたくさんあり、とても感動していました。カブトムシもたくさんいて小学生の男の子は大喜びしていました。

今回かなり人数が多かったのですが、やはり夜の観察会は知っている場所でもひとりで来園者を連れて歩くのは安全面などから考えてできないそうです。だから、もしひとりで夜出歩くときは昼に十分に場所を確かめて行く必要があると言う事でした。

昆虫館を出発する前に、昆虫館の前の広場に白い布をかけ、ブラックライトや水銀灯を当てておきました。帰ってきて見てみると、たくさんの昆虫が集まってきていました。夜で歩けないときには、家にこのような仕掛けを作っておくと、ひとりでも安全に夜の虫を観察する事ができます。

3. 解説の際、注意していること

この施設にはさまざまな人が訪れる。子供連れはもちろん、大人だけのグループを解説するときもある。そのために、その場その場で解説の仕方も変わってくる。子供に対しては、詳しい名前などは言わずに生息場所や食べ物などを解説したりしている。大人に対しては、日常生活と結びつけたり、歴史なども合わせて解説を行っている。例えば、ヤマユガという蛾の蚕は普通の絹糸の何 10 倍もの値段がする、という話を織り交ぜたりする。このようにして、大人も子供も自然と楽しんでもらえるように工夫している。また、大人と子供と一緒に解説するときにも、大人にも子供にも話し掛けながら解説を行い、来園者が飽きないように心がけている。

もうひとつ注意していることは、五感で体験してもらおうということである。解説員の話聞くだけでなく、実際に昆虫を手に乗せてみたり、においをかいだり、触ってみたり、鳴き声を聞いてみたり、植物を食べてみたりすることができる。このような体験により、体で体験するということの大切さを知ってもらうのである。頭でわかっていたことでも、実際に体で体験すると今までとはまた違った感じ方をすることができるのである。

4. 一年間の行事・内容

このたびら昆虫自然園では、1年間でさまざまな行事を行っている。H12年度は、下記のような行事が行われた。

行事	内容
観察会	年 5 回程度、約 2 時間行われる(「花に集まる昆虫の観察会」など)
夜の観察会	年 5 回程度、約 2 時間行われる(昆虫の夜の様子を観察)
夏休み昆虫実験教室	年 1 回 (昆虫の生態を生かした実験)
工作教室	年 1 回(表彰・作品展示も行われる、植物など自然のものを使って)
写真コンクール	年 1 回 (表彰・作品展示が行われる)
昆虫採集・標本作り教室	年 1 回(3回に分けて行われる)
昆虫写真講習会	年 1 回(写真家の栗林慧氏を迎えて行われる)
親子押し花教室	年 1 回(講師を迎えて行われる)
折り紙教室	年 1 回(折り紙を使って、昆虫を作る)
たびら昆虫自然園スケッチ大会	年 2 回(園内でスケッチを行う、表彰・展示が行われる)
自然教室	年 7 回程度(大人を対象とした観察会、園外に出て観察会を行う)

いくつか詳しく説明していく。

(1) 観察会

これは、普段行われている解説をもっと詳しくしたものである。季節ごとにテーマを決めて行われている。例えば、表に載せたもの以外にも「草はらの昆虫の観察会」、「水辺の昆虫の観察会」、「越冬昆虫の観察会」などがある。また、普段の観察会には使わないような道具を使ったりもする。例えば、大きなルーペ・虫取り用の網などである。参加はどんな人でもできる。やはり小学生が多いようである。

(2) 夜の観察会

これは、夏場の夜に行われ、人数は約 20 人程度で予約が必要である。夏場の昼間は暑くて昆虫が隠れており、観察に適していない。昆虫は夜の涼しい間に活発に活動するからである。しかし、夜の観察は樹液に残っているスズメバチやマムシが出る危険があるために、約 20 人の来園者に対して 4・5 人の解説補助員がつく。園長は、知っている場所だから夜に解説ができるとおっしゃっていた。それだけ、夜の観察は危険が伴う。しかし、その分得られるものは大きい。クワガタやカブトムシはもちろんゾウムシ、ナナフシ、ヤブキリ、ウマオイなど昼間に比べるとはるかに多くの昆虫を観察する事ができる。

(3) 写真コンクール

一般の人からいろいろな場所で取った昆虫の写真、もしくは園内での観察風景の写真を募集する。アマチュアとは思えない写真が多くある。応募者は、長崎県の人はもちろん福岡県や佐賀県、熊本県、鹿児島県などで、九州各地から応募がある。H12年度には50名の参加者があった。応募があった写真は、栗林慧さんをはじめとする審査員に審査され、優秀な写真は表彰される。また、作品展示が昆虫館で約2ヶ月間行われる。

(4) スケッチ大会

主に小・中学生を対象にして行われる。最初は園内を回り、どこにどのような虫がいるか解説を受ける。スケッチする場所は園内のどの場所でもよい。絵の具やクレヨン、色鉛筆など、いろいろなものを使って自由に書いていた。特に小さい子の絵はいろいろな視点で絵がかかれており、さまざまな絵が出来上がっていた。この絵も表彰され、2週間程度昆虫館で作品展示が行われる。



5. 昆虫園の経営について

たびら昆虫自然園は、田平町役場の企画振興課と田平町の振興公社が中心となって運営・管理されている。昆虫園に勤務する職員は、園長と事務がひとりである。

(1) 予算について

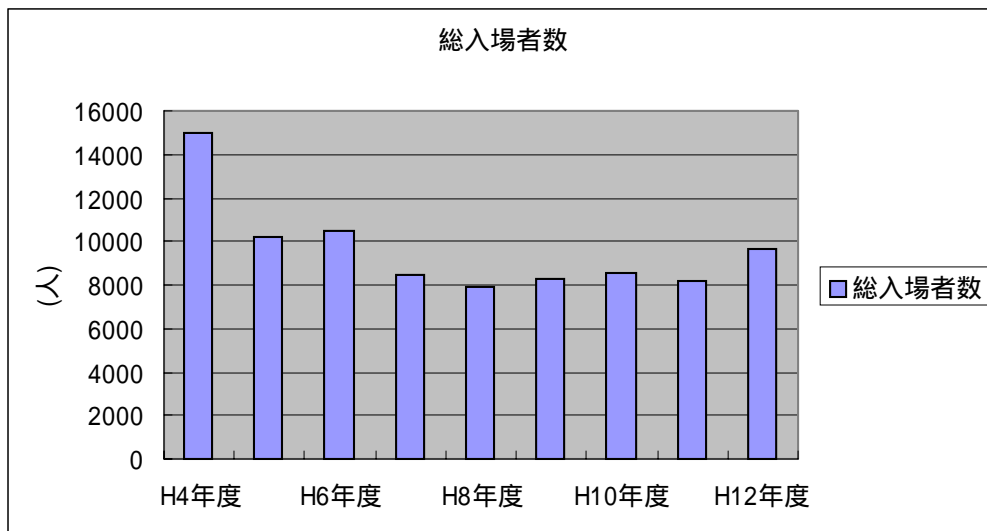
予算総額は年間約 1,500 万円である。内訳は、人件費、光熱費、広告費などである。これとは別に、設備費・維持費などがある。園での収入は 300 万円程度で、残りの 1,000 万円以上は税金でまかなわれている。しかし、この程度の安い費用でこの昆虫自然園を運営・管理し、かつ前述したような効果がある施設は日本にたくさんあるわけではない。現在、環境教育が注目される中で今後さらに大きな役割を果たすであろう。確かに、教育に関する施設は営利目的でないために、赤字は避けて通る事ができない。財政難となれば、よほど価値のあるものでなければ予算は打ち切られてしまいかねない。その中で、この昆虫園が重要視され今後長く続いていくためには、やはり納税者の理解が必要となってくる。今後は、町民の理解が得られるために結果をきちんと報告する機会や、啓蒙活動をするなどの努力が必要である。例えば、町民の利用者には入場料を割り引くことや、町内の幼稚園児や小中学生を対象にした企画を提案し、実行していく事などが考えられる。また、(2)で示すが、入場者数の増加にも努力が必要である。

(2) 入場者数について

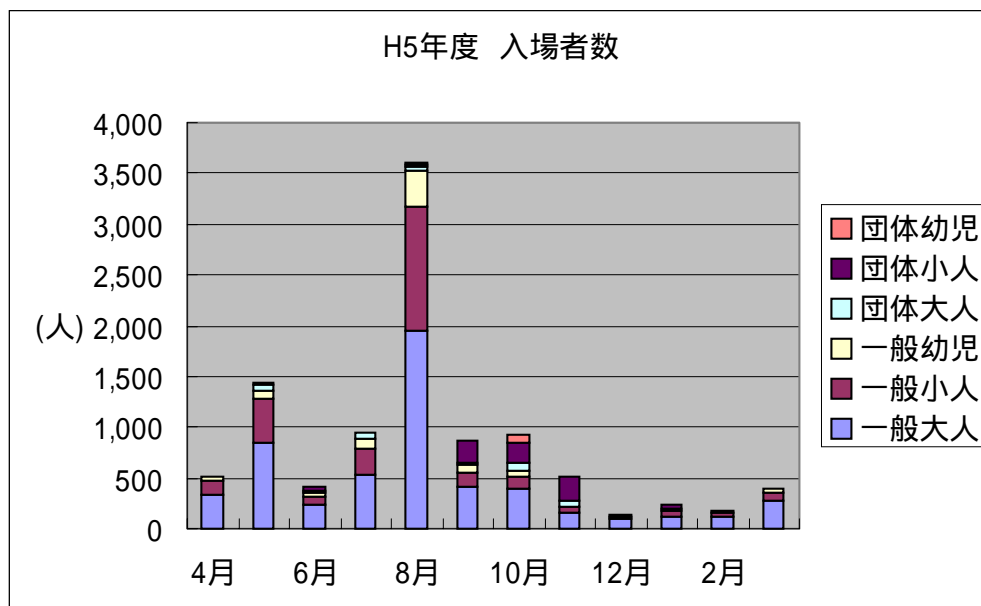
年間入場者数(表 1)は、約 8,000 から 10,000 人程度である。H13 年度の入場者数は 10,000 人を超えるようである。しかし、初年度に比べると減少傾向にある。これは、初回訪れた人がその後 2 回 3 回と足を運んでいない事を示している。この園は、季節ごとに見ることのできる虫が変化する、時間帯によっても違うほどである。このようなことをアピールしてリピーターを増やしていく手段が考えられる。ここ 2・3 年の間で環境教育が注目されており、テレビ局や新聞社で取り上げられる事も多くなったようである。遠方からの来園者も増えてきている。しかし、流行で終わってしまったのはいい施設であるので無駄になってしまう。まずは、地元から理解され支えられていくような体制作りが必要となる。

また、月別入場者数(表 2～表 4)を見てみると、カブトムシを見たいという親子連れが多いために 7・8 月の入場者数は以上に多いが、9～3 月までの入場者数は月に 500 人にいたっていない月が多い。この 9～3 月の間は虫を観察しやすい時期である。昼間の観察に関しては、7・8 月よりはるかに種類も数も多い。この期間を有効に利用していくために、虫の情報や園内で観察できるものを多くの人に知ってもらえるようアピールしていく必要がある。

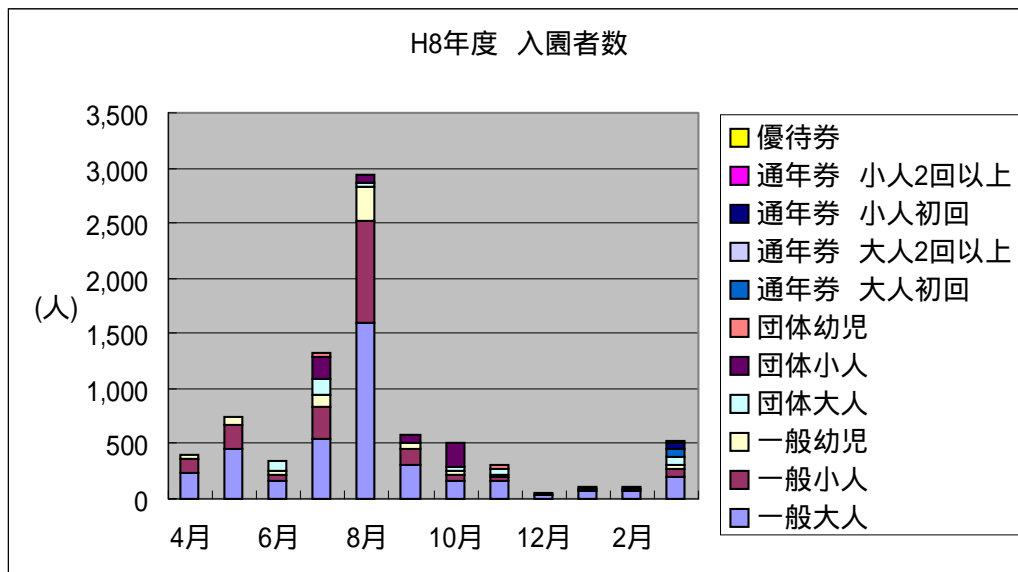
(表 1 : 年別入場者数)



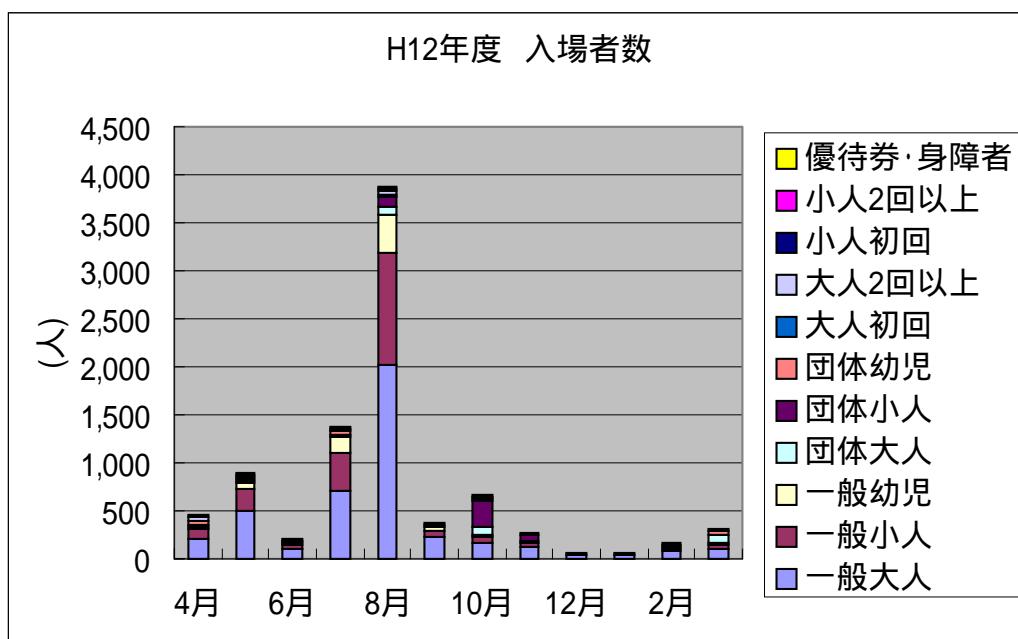
(表 2 : H5 年度月別入場者数)



(表 3 : H8 年度月別入場者数)



(表 4 : H12 年度月別入場者数)



(3)後継者について

後継者については、余り考えられていないようである。現在の園長は、あと 10 年ぐらいで定年となってしまう。この園でおこなわれていること(解説や環境作りなど)は 1 年や 2 年で身につくものではない。最低でも 4・5 年は必要であろう。町の予算では、あとひとり職員として雇うのはかなり難しいようである。しかし、臨時職員でもいいので、今の体制を引き継げる若手の人材を作っていくことは必要であろう。そうしなければ、今の園長がいなくなってしまうとこの園は存続が難しくなってしまうだろう。このような、ハード面でもソフト面での利用価値のある施設がなくなってしまうのは大きな損失であるので、一刻も早くこの問題に取り組んでもらいたい。

6 . 提案

たびら昆虫自然園の調査を行い、今後の課題として大きなものとして園自体どのように運営していくのか、と言う事がある。

この問題を解決する手段の一つとして、外部機関として NPO 法人を立ち上げ、その機関に運営を委託するという形である。NPO 法人という形であれば、1500 から 2000 万円での運営は十分可能である。もちろん、毎年結果を報告する義務があることから町の機関として運営するよりも透明な運営が必要とされるために、町民には理解されやすくなるという事がある。また、職員として大学院生を雇うなどすれば、安い賃金で施設のためにも後継者育成のためにも職員の研究にも役に立つと言う、一石何鳥にもなる。つき 10 万円で 2 人雇うとしても年間 480 万円の費用で済むことになる。このような事を公募すれば、やりたいと言う大学院生はたくさん集まるであろう。また、夏休みなどの大学の休業期間には学生スタッフを募集すれば、学生にも勉強のいい機会を作ることができるし、夏場の多い来園者にも対応しやすくなるであろう。園長が退職されたときには、ご意見番になっていただき今後の運営に携わっていただく事もできる。このようなことから、NPO 法人を作ると言う手段には、大きな効果が期待される。

第 2 章 解説員制度の先進事例

たびら昆虫自然園の調査にあたり、解説員という制度が他の地域で行なわれている事を知り、先進地である上野動物園・多摩動物公園・葛西臨海水族館にその状況を調査した。

1. 解説員制度について

解説員制度については、(財)東京動物園協会が中心となっで行なわれている。解説員は以前は有名な先生を呼んでいたが、現在では一般公募で選考が行なわれる。解説員は、3年に一度一般公募と一緒に選考されるという形式をとっている。選考内容は、企画書と面接である。各施設には3~4人の解説員がいる。このそれぞれに施設で、一般の来園者に解説を行ったり、学校施設の見学をサポートしたり、小中学生や大人を対象とした企画を行ったりしている。

たびら昆虫自然園との大きな違いは、すべての来園者に対して解説を聞いてもらうわけではないということである。この3つの施設では、一日に2回ガイドツアーとして解説を行っており、参加は無料で自由に参加することができる。このガイドツアーでは園内全てを案内するわけではなく、何かテーマを持って、約45分間解説を行っている。たとえば、“アフリカの動物たち”と言うテーマでアフリカゾウやライオンの特徴・生態を楽しく解説している。解説の時には、動物のえさや糞、骨などを実際に見たり触ったりすることができる。また、クイズ形式のブックレット(小冊子)を使い、歩き方や角の形、くちばしの使い方などがどうなっているのか、ということを楽しく知ることができる。しかし問題点として、解説と言う事があまりよく知られておらず、なかなか参加してもらえないと言う事実がある。実際にガイドツアーに参加してみると、動物たちを見ていただけではわからない事をいろいろと知ることができる。(写真・)親子連れには、子供と一緒に勉強する機会を得ることができ、コミュニケーションをとるいい場が作れるのではないかと。ただ、園内を見て回り今まで見ていなかった視点で動物たちを見ることができ、さらに生き物の大切さも知ることができる。



<写真> 解説の様子



<写真> サイの足って大きいね

2. 多摩動物公園での企画 - 「探検! 雑木林の動物たち」 -



この企画は、小中学生を対象に行われたもので、「身近にこんなかわいい動物が住んでいるよ。」ということを知ってもらうために二日かけて行われた。この企画はハガキで参加者を募集し抽選が行われている。かなり倍率が高いようである。企画には、3人の解説員と2人の補助員がつき、15人の子供たちに解説を行う。親には一切この行事には接してもらわずに、子供たちだけでこの企画に参加する。親が参加しない事によって、子供は自分でいろいろな作業を行い、またこの企画の中で友達を作ってお互い協力する、と言う事も学ぶ事ができる。

< 実際の様子 >

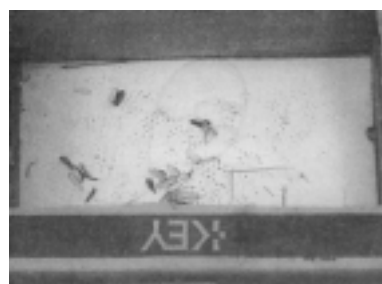
今回の企画の内容は、林を探索し、林の中にネズミを捕まえるトラップと足跡とラップを仕掛けて、実際にネズミがいることを確かめたり観察したりすることでした



まず、一日目の午前中には多摩動物公園の側にある林の中を探検して、動物の足跡やネズミが食べそうなものを探しながら歩き回りました。最初は何をしていたかわからなかった子供たちが、「下にどんぐりが落ちてるよ。」とちょっと声をかけると、目が慣れてきて自分たちで木の実や虫を見つけていました。あくまでも、ネズミの観察が目的なので子供たちが採集に熱中しないように持っていくのが大変そうでした。探索のときに、ネズミの巣穴がありそうな場所を探したりしました。

午後には、トラップを作り林の中に仕掛ける作業をしました。まず、足跡トラップを作りました。ひとり1個ダンボールを持ち、上のふたとネズミが入ってくる横穴を開け、底に白い紙を敷き入り口にネズミの足跡がつくように墨汁に浸したスポンジをおきます。中には、入り口を2つ3つ作っている子がいたり、外に絵を書いたりといろいろと工夫して作っていました。その他にも、ジャーマントラップと言うネズミを取る仕掛けも用意しました。足跡トラップにはヒワマリの種を、ジャーマントラップにはりんごを入れ林の中に仕掛けました。仕掛ける場所が、草が茂っていて斜面になっているために、子供たちは仕掛けるのに苦労していました。「次の日、ネズミ入ってるかなあ?」と楽しみにしていました。そのほかにも、模造紙を使った大きな足跡トラップや動物が通りそうなところにひまわりの種をたくさん置いてみたりしました。

二日目には、ネズミが取れている蚊、足跡がついているか、子供たちはワクワクしながらやってきました。森の中に入ってみると、足跡わなには半分以上の子供たちの中に足跡がついていました。本当にネズミがいる事がわかり、





も食べた後があり、大きな足跡トラップには猫の足跡らしきものがありました。後は、ネズミがかかっているんじゃないかと子供たちは興奮していました。ジャーマントラップを取りに行くと、15人中6人のトラップにネズミがかかっていました。これには、みんな大喜びでした。

広場に戻って、まず足跡の観察。どれが前足か後ろ足かと教えてもらい、印をつけていきました。いくつも重なっていて、確かめるのはかなり難しかったようです。

次に、罠にかかったネズミを水槽に移して観察しました。水槽に入れる前に、ビニール袋に入れ重さを量りました。その後水槽に入れ、性別・体長・尻尾の長さ・特徴などを観察してスケッチし、それぞれのネズミを比べてみました。小さいネズミや大きなネズミ、動きが速いネズミやかわいい仕草をするネズミなどいろいろな特徴があって、初めて見たと言う子供も多くとても喜んでいました。その後、一日目にとってきたネズミの餌になりそうなものをネズミに上げてみました。木の実や虫を見て、自分たちが取ってきたものをネズミたちが食べていると言う事を実感していました。観察が終わった後に、ネズミがいた場所に戻してあげました。「かわいいからもって帰りたい。」という子供もいたのですが、野生の動物は自然に帰して上げるのが一番大事なことだということをわかってもらうために、林の中に逃がしてあげました。逃がすときに、林の中に板で囲いを作り、ネズミの尻尾に印をつけ林の中でどんな動きをするのか、と言う事も観察する事ができました。

子供たちにとって、身近にかわいい動物がいると言うことを実感できる企画でした。

第3章 ワークショップ

「たびら昆虫自然園で作業体験」

この企画は、大学生にたばら昆虫園のような野外教育施設を知ってもらい、来園者としてではなく実際に管理する立場を学んでもらうために実施した。また、施設側にも大学生が少しでも仕事ができる事を理解してもらい、今後大学生やプロを目指す人たちがこの施設の仕事を手伝わせてもらいながらフィールド研究ができるための第一歩として企画した。

1．実施内容

場所：たばら昆虫自然園

日時：2001年12月14日(金)

10：00～12：00 昆虫園の説明(昆虫園について、作業の説明)

13：00～17：00 作業・かたづけ

作業内容：蔓(つる)からカミキリトラップを作る

参加人数：10名

2．参加の様子について

参加者は、この昆虫園を訪れたのが始めてだったので、園について園長からお話していただき、園内を回って園の解説や作業の説明をしていただきました。

まず午前中の園の説明では、昆虫園そのものの成り立ち、この園ができたきっかけ、この園の意義、どのようなコンセプトで作られたのか、園内での解説の仕方がどのように行われているのか、この園の経営状況について、と言う話を園長からしていただきました。



その後、実際に園内を回り説明を受けました。あいにく曇交じりの雨が降ったり止んだりという悪天候だったのですが、何とか外での活動を実行する事ができました。最初は、実際に園内の解説をしていただき参加者に解説がどのようなものであるのか体験してもらいました。体験する事で、この園での解説の意義や特徴を肌で感じてもらいました。

この園のことをよく知ってもらった後に、作業を体験してもらいました。このような作業を体験するのも、させるのも初めてのことだったので、簡単な作業を指導してもらいました。指導してもらったのは、カミキリトラップを作ることです。カミキリトラップを言うのは、植物のつるを刈ってリース状に丸くしたもので、木にかけて置き園内を回り解説をするときにそのトラップの中にいる昆虫(主にカミキリ)を観察するためのものです。園内にはこのように虫が観察しやすいように、虫が集まりやすいように環境整備を行っています。

まず、鉋や鎌を使いつるを刈り取りました。このつるは、地面をはって伸びているために付け根が地面すれすれのところにあり、鉋や鎌を使い慣れていない事もあって参加者は苦労していました。慣れるとだんだん面白くなってきたようで、楽しみながら作業も順調に進んでいきました。園長の予想よりも多くのカミキリトラップができたようです。ひとりでやるとかなり時間のかかる作業が短時間でできたので助かった、との事でした。参加者も、ひとり一人この園で得たものがあつたようです。以下に参加者の感想を載せています。



3. 作業を体験しての感想文

- 長崎大学水産学部3年生 -

作業体験に参加したいと考えたのは、もともと自然が好きと言う事もあるが、それに加えて“たびら昆虫自然園”は普通の動物園・水族館や博物館とは違うものであると言う事を知り、どんなところなのか訪れてみたいと思ったからである。

はじめに園長さんから園についての説明を聞いた。前もってこの園では里山のように環境を整備し、昆虫は持ち込まず自然に集まって増える事に任せていると聞いていた。里山という言葉は聞いた事があつたがどのようなものかは説明できなかった。話を聞いてみると認識していたものと少し違っていた。人が生活するために自然に手を加えたものが里山で、何も手を加えないままよりもむしろ加える事で生物の種類が多くなると聞いて驚いた。人間は他の生き物に対し減らす方向にしか作用しないのではと考えていたからである。

園長さんの話の中で昆虫を他から持ち込まないと言う事の意義を知ることができた。一つはその土地にもともと住んでいない昆虫を放しても環境に適応できず生き延びる事ができないものがある、もしくはもともと住んでいる生き物を駆逐してしまうことがあるということ。もう一つは、その土地で何代も世代を重ねその土地に適応した特有の遺伝子を持った地域個性群に他からの生き物を持ち込む事によって、遺伝子の交雑が進み地域での特異性がなくなるとのこと。これは遺伝子が単一化するという事で病気などにより全滅してしまう可能性が高くなるという事である。生き物の数を増やしたい、種が同じなのだから、と言う安易な考えで生き物を放すのには大きな危険が隠れていると言う事を知った。

珍しい昆虫を展示する事より、普段見ることのできる昆虫の生活の様子を見たほうが、その昆虫が卵を産む時から蛹になり成虫になるという生活の流れを知ることができる。このことはとても納得のいくことだと思った。いくら珍しい生き物についての知識が多くても、もし自分が親になったとき子供に道端にいる身近な生き物の事を教えてあげられないと子供の心には残らないだろうと思う。普段見る生き物だからこそ新しい発見より驚きが大きいも

のとならと思った。

持ち込みはしないでも環境さえ整えれば生き物は集まってくるというのは、園の開園時1,500種程度から今では約3,000種と言う数がわかっているが、数年でこんなにも増えるとは生き物たちのたくましさを感じた。生き物には生きていくのに適した環境が必要で、特に産卵するため子供が育っていくための環境が、増えるためには必要だと言う事である。この園では、人間によって数が減っている生き物がたくさんいるがそんな生き物も生息していると聞き、環境整備がしっかり行われているのだと感じた。

いよいよ実際に生き物を見ることになった。まず外へ出る前に館内で見せてもらったのは“ヒナカマキリ”と“土”だった。ヒナカマキリは本当に小さく手の上に乗せると、見ていだけよりなんともいえない愛着がわいた。土のほうには中に黒い粒があり、それから中にいる生き物を予想した。わかっている人が、粒は糞で中にカブトムシの幼虫がいるのだと答えを言った。しかし、信じられなかった。カブトムシの幼虫を目の前で見たことなかった私は自分が予想していたより糞が大きいからである。何でだろうと不思議に思っていたらカブトムシの幼虫を目の前に出してもらって驚いた。大きかった。予想していたよりはるかに大きく糞の大きさに納得した。テレビ・写真で見るとはぜんぜん違い、見たときのショックが大きく、触ってみる事で本当に生きているものだという実感がわいた。

外に出て、いろいろな生き物や植物を見ながら説明してもらった。園内は舗装された道はあまりなく枯葉の上を歩いて回ることが多かった。歩きながら周りを探してみるとたくさんの生き物たちがいた。初めのうちはこの辺りを見てと言われて見ていたが、そのうち自分から探してみるようになった。何か見つけたら触ってみた。植物だったら匂いをかいでみたり、食べてみたりした。葉がいい香りがしたり、冷たいと思っていた水が触ってみると意外に温かかったり、植物の実がすっぱかったり、甘かったりした。年をとると、見ただけでそのものの感触などを先に予想してしまうが、実際に触って匂いをかいで食べてみたりすると、予想できないものがたくさん得られた。次々にいろんなものに目が行くようになり、そのものが何なのか知りたいと思うようになった。説明してもらおうと、何で葉からにおいがするのか、地下の水だから温かいとか、目の前のものの事なので印象に残り、またさらに面白さがわかり、ますます興味がわくようになった。

園内を歩き回りいろいろなものを見たが、その園内は草を刈ったり木を切ったり手を加え整備されていて、今回園内の整備作業を少しやらせてもらった。作業はつるを切り、輪に巻き取り生き物が住むように木にかけておくというものであった。今回はこの作業だけであったが、生物が住むための環境を整備するためのいろいろな事を行っている事を聞き、なぜその作業をするのかなどを教わった。

たびら昆虫自然園は、動物園・水族館・博物館のように見るだけ聞くだけのところではなく、見て、触って、嗅いで、食べて、目の前にいる生きているものを実感できる場所であった。

実感した後にそのものの説明を聞くと納得ができ、他のものに対しても興味がわきもっと知りたいと感じるようになった。植物を見てもその形や色にはこんな意味があるのではないかなど、見た感想だけではなく意味を考えたり、ものを見ることに楽しさが加わるようになったり、見るだけではわからないたくさんのものを得ることができた。先入観を捨てリアル

に生き物を感じる事ができ、好奇心がどんどんわいてくる体験であった。

- 長崎大学水産学部 3 年生 -

私は学園祭でリサイクル活動を行い、環境保全活動はどんなに自分がかんばろうと周囲の理解や協力がないと結局のところ事態は何も変わらないと感じた。そこで、「環境問題は心の問題」と考えたことから環境教育に興味を持つようになった。今回の作業体験の募集のポスターには「環境教育」という言葉が書かれていたので、迷わず参加したいと思った。だが、今はまだ「環境教育」とはどんなものだとか聞かれても答えられないので、これから勉強するつもりだ。それに実は昆虫は大の苦手で、“たびら昆虫自然園”の存在は知っていたものの、絶対に行く事はないだろうと思っていた。しかし、生物が好きだと言っている以上は克服しなければならぬ、と考えていた事も参加理由の一つだ。

実際に行なった事は作業と言うよりも園長さんからの話と説明が主だったが、それがとても面白かった。例えば、「大人になると見ただけでわかったつもりになって触ろうとしない」と園長さんが話されていたが、本当にその通りで私は木の幹の刺を見て「痛そう」と思い触らなかった。しかし、触って痛い思いをする事で子供は成長する。こういう場を与えてくれるのが自然なのだ改めて感じた。また、冬場だと言うのに花が咲いたり木の実があったりして驚いた。これはそれぞれの植物たちの戦略である事を聞き、感動した。

人間の資格・聴覚・味覚・触覚をフルに活用させて自然と向き合う事は新たな発見を引き出してくれる。日常は特に気に止めない大学内の木を見ると、ミノムシが付いていたり、葉の中に虫が隠れていたり、と言う事を発見できた。冬の昆虫なんかいないと考えていたが、夏のように飛び回っている事はないが、探せばたくさん隠れていた。今回の活動はこのように自然を再認識させてくれた。今は教室の窓から見える枝や葉を見ているだけでも楽しくなってしまう。

最も感心した事は、里山である。人工物は自然にふさわしくない、原生林のように人間の手が入っていないところで生物が繁栄するのかと思っていたら、実はそれよりも里山は生物の多様性が高くなるという事がわかった。里山は人間が炭や薪に使うための雑木林や、かやぶき屋根を作るための萱場など、人間にとって有用な植物しか生えさせないというののである。昔の人は自然と仲良くお互いうまく共存していたのだと感じた。

たびら昆虫自然園では解説員を常時置いているという。ただ見るだけではなく、解説してもらえば見方も変わるし世界も広がる。しかし、解説員を常時置いている博物館などは少ないと聞いた。これは、日本人はひとりで勝手に見て人との交流を避ける傾向があるためという。日本には多くの自然園があるのにもったいない。将来、いつか解説員やレンジャーのような仕事について、自然の面白さ・厳しさをみんなに伝えていきたいと強く思った。

- 長崎大学環境科学部 2 年生 -

今回、たびら昆虫自然園の作業体験に参加した理由は、私が昆虫や自然が好きな事はもちろんだが、それよりも環境教育に興味があり、一度実際に現場を見ておきたいと思ったからである。また、私の興味がある環境教育は教室でやる教育とは違って、フィールドワーク的な教育である。特に、自然の中に飛び込んでいろいろなものを「見て、聞いて、嗅いで、触って、食べて」という五感を使って自分たちで感じることで環境と言うものを学んでほしいのである。このような五感をフルに使う事ができるのは自然の中に溶け込む事であり、自然と遊び、自然と一体化することだと思う。その上で今回の体験は私自身勉強になった。

田平にははじめて行ったが、自然がまだまだ残っており昆虫には最適な場所だと思った。始めに園長さんが昆虫園や里山、動物園や水族館との比較などについて話をしてくれた。話の内容は私の知らない事ばかりだった。印象に残った話は、私は里山について良く知らず、里山は人間が作り出した環境であり、生物の中にはこの里山の環境でないと生きることができないものがあると言う事である。今まで人間が自然や生物多様性を壊してきたと思っていた。確かに、壊してきたのは間違いではないだろうが今のような異常なまでの開発をしなければ、自然界でも人間の手が必要な生き物があると言う事を知った。

この昆虫園の最大の特徴は、昆虫を他から持ち込まずに昆虫自身が自然に集まることを主としている事であり、珍しい生き物がないことである。これぞ自然の昆虫園だと思った。話のかなで最も印象に残ったことは、解説員の役割である。これは最も環境教育に関係しており、すごく参考になった。『解説員は教えるのではなく、一緒に遊ぶ事である』菌、私が考えていた事と一致していた。園長によれば、子供たちに虫を見つける面白さを教え、虫とふれあい(虫をつかませるようなことはしない)、触る前によく虫を観察させる。これは、虫の生活している姿を見て何をしているのか、どのような動きをしているのかということを観察させる事で、子供に考えさせるためだと言う。そして、ここでの体験を自分たちが別の山で行った時や別の自然に出会ったときにまた生かすことができればいいのである。これは、自然型環境教育をする上で一番重要なことだと思った。

今回参加してみて、知らない事ばかりだったので全てが勉強になった。自分の無知を感じるとともに、もっとたびらの事や全国の昆虫園の事などを知りたいと思った。たびら昆虫自然園をフィールドとして私が何が出来るかはまだ定かではないが、これからもっと知識をつけて環境教育についても自然についても学びたいと思う。また、今回の体験を活かして学校や山に行った時には別のフィールドとして五感をフルに使って自然から多くのことを学ぼうと思う。

- 長崎大学環境科学部 2 年生 -

僕は、子供の頃から昆虫がとても好きだった。今回、この昆虫自然園の話聞いたとき、「行くしかない!」と思った。実際に行ってみて、また園長さんの話を聞いてみて、改めて多くの

事に気付き学ぶ事ができたと思う。昆虫と触れ合う、自然を感じる、そんな事は子供の頃には誰もが無意識にできたことのはずだろう。子供は確かに乱暴な面もあるかもしれない。しかし、何の先入観もなく、自然や昆虫に接する事ができる。大人は見た目で物事を判断してしまったり、考えすぎてしまったりして、本当の自然の姿に接する事ができなくなってしまっている。頭で自然を感じようとしてしまうのだ。僕たちもそんな大人の見方で自然を知ろうとしていた。刺があれば痛いもの、水は冷たいもの、それに触れようともせずに判断してしまっていた。自然に限らず、何事においても頭や知識だけで理解し、判断できる事はそう簡単にはないはずである。

観察ゾーンの中を歩いたとき、とても懐かしい感じがした。子供の頃に遊んだ近所の裏山に似た雰囲気があったからだ。あの頃は何も考えずに、ただ山の中を走り回って遊んでいた。大人になって、自然や環境に興味を持ち自然と言うものにもう一度触れてみたくなった。ただ遊ぶだけではなく、もっと本当の自然を、昆虫や動物たちの目から見た自然を知ってみたいと思った。また、自然とうまく共生していた一昔前の日本人の知恵を知ってみたいとも思っている。里山は、人間が生活のために管理していた林だが、それは昆虫や植物にとっても住みやすく、特別な場所であった。この昆虫自然園もそのような里山と同じような環境を作っている。違う場所から持ち込んだ特別な昆虫はいない。全く普通の状態のままである。それにもかかわらず、たくさんの昆虫が集まってくるのは、この昆虫自然園が里山同様に昆虫にとって魅力的なものなのだろう。人が手を加えて作り上げた環境、それも立派な自然と言う事である。

また、今まで気付かなかった多くのことを知ることができた。実感する事はできなかったが、枯れた木と生きている木の温度の違い、松の樹齢の数え方やその特徴、木の実の味、葉や花の匂い。そのようなものを一つひとつ触れてみて、知り、感じていく事が自然を理解する、自然と共生するということにつながっていくのだろう。

- 長崎大学環境科学部 2 年生 -

昆虫園に行ってみて、たくさんの事を改めて学んだ気がする。今まで、ずっと自然の中で育ってきたと感じていたが、実際自然については何も知らなかった気がする。だから、今回昆虫園に行けたことは自分にとって子供のときを思い出したり、新しく学んだりした事が多かった。最近思う事は、年を重ねるにつれて時間に追われて自然と触れ合う事がなくなったり、いつのまにか子供の考え方を忘れ大人の考え方になったりしていた気がする。それを強く感じたのが、昆虫園の中に入ってから園長さんに言われる間の行動を考えたときだった。外に出てすぐに感じたのは、寒いとか雨が降っていると言う事しか考えてなくて、そこに昆虫がいることなんか考えていなかった。大人になって、低い所や高い所を見なくなった気がした。子供のときは、低い所で遊び、昆虫とよく出会い、高い所に憧れて隠れている昆虫にもよく出会った。大人になるにつれて、低い所で見るものがなくなり、高い所への憧れもなくなった事は、同時に寒中や自然についての興味もなくなっていた気がする。大人的な考え、

それは物事を勝手な判断で決めつけてしまうことに他ならない。もっと五感を使って物事の本質を考える事が大切だと思うし、今の社会にはその部分が欠けていると思う。大切なのは、頭で考えるのではなくて体で考える事であると思う。

もう一つ昆虫園で感じた事は、昆虫園が日常的であることだった。それはこの昆虫園が外部からの昆虫の持込が一切ない事であり、どこにでもいる昆虫がいることで、身近な自然にも同じ昆虫を見つけることができることだった。日常的に存在することは、もっと昆虫を見て考える事ができるし、見ようという努力をすれば見ることができるのだと感じた。近くの公園にも昆虫が住んでいる可能性があるのだ。ただ、私たちが見ようとしていないだけなのだ。昆虫は何も特別な存在ではないし、この昆虫園に昆虫がたくさんいることは、昆虫にとって住みやすい環境であるということだけなのだ。つまり、昆虫が住みやすい環境を人の手で作り上げているのだ。昔の日本人は、昆虫や自然とうまく接してきたように思う。自然の中に入り、自然と共に生活して生態系の一部と化してきた。そこには、人と自然との共生が成り立っていたのだと思う。自然が日常として存在してきたから、自然を守る事が当たり前のように存在してきたのだ。だから、私たちはもっと自然を日常のものとして考え、自然の中で暮らせるような人になっていくことを望む。特に、日本人は自然とうまく接する事のできる能力を持っていると思う。人と自然が共存できる技術を先人から学んでいきたい。